

〈原著論文〉

## 津軽の民俗芸能「荒馬」の比較研究

沼倉 学 (宮城教育大学)

## Comparative study of Tsugaru's folk performing art "Arauma"

Manabu NUMAKURA (Miyagi University of Education)

## Abstract

The purpose of this research is to determine the area of the Arauma that has been passed down in the Tsugaru region based on the distribution and characteristics of the performance of each region, and to create a typology of Arauma through a comparative study of typical Arauma.

Three areas are defined: Minami-Tsugaru region, Kita-Tsugaru region, and Kamiso region. Then, as typical examples of these areas, we selected and compared and studied the Yawatazaki Arauma, Kashiwagi Arauma, Kanagi sanaburi Arauma, Aiuchi Arauma, Imabetsu Arama, and Okawadai Arama.

The style common to all of them is the shape of hobby horsies and the way they put their bodies inside them and dance like horses. In addition, all the Arauma can be seen stepping on the ground, which is thought to have the meaning of driving away evil spirits within the ground.

Arauma in the Minami-Tsugaru region is closely related to Komaodori, and is a performance in which the horse role is independent without a bridle handler, and is characterized by repeating a single dance consisting of a combination of movements centered on stepping on the ground three times.

Arauma in the Kita-Tsugaru region is danced during Mushiokuri by a trio of three people, one horse actor and two bridle handlers, and is characterized by the impromptu dance that expresses the appearance of the horse.

Arauma in the Kamiso region is danced during the Nebuta Festival by a pair of male horse and female bridle handlers, and there is a single dance that combines the action of stepping on the ground three times and once.

Keywords: Arauma, Tsugaru region, Hobby horse, area

## 1 はじめに

## 1-1 研究動機・目的

津軽の荒馬（あらうま・あらま）は、馬を模した衣装を身につけて踊る青森県津軽地方を代表する民俗芸能の1つで、時代の流れと共に広く伝播し、その土地の生活や文化に合わせて変化してきた（小池, 1961 : 2-9、進藤, 1970 : 409-410、大石, 2010 : 168-174）。『民俗芸能辞典』では、荒馬を青森県、秋田県、岩手県に伝わる駒踊<sup>注1</sup>の一種とし、基本的芸態を「木製の馬の首の作り物と尻毛尾のついた楕円形の竹の枠型の作り駒を腰にくくりつけ、あたかも人が馬に乗っているように身づくろいをして踊るいわゆるホニホロ式<sup>注2</sup>

の騎乗擬態の風流踊」（仲井ら編，1981：187）と説明している。そして、北津軽郡金木町（現五所川原市金木）の「金木さなぶり<sup>注3</sup>荒馬」を例にあげ、解説している（仲井ら編，1981：187）。このような作り駒をつける芸能が北東北地方の多くに分布している。

津軽の荒馬の大きな特徴は、地域によって踊られる年中行事が異なっていることである。南津軽地方ではボウノカミ送り<sup>注4</sup>の中で、北津軽地方では虫送り<sup>注5</sup>の中で、東津軽地方ではねぶた祭り<sup>注6</sup>の中で、それぞれ地域毎に独自の芸態を持った荒馬が踊られる。これらの年中行事は全て「神送り」に通じ、人間生活に負の働きかけをする神を鎮圧して再来をこばもうとする儀礼として（仲井ら編，1981：126-127）「風流行列<sup>注7</sup>」の形態で行われてきた。

ところで、可変的かつ流動的な文化的総体としての伝統芸能、荒馬の変化に着目することは、いかなる学術的意義を伴うのか。

民俗芸能の分布について、植木（1993：11-36）は、一定の地域に集中して分布し、それぞれに1つの圏域をなし、さらに周囲のものやと連なってより大きな圏域を形成するとしている。そして、その圏域毎に典型となる芸能を抽出して比較検討することで、その民俗芸能の歴史の変遷を辿り、民俗芸能の時代性を追究し、相対的年代を明らかにする編年的考察が可能になるだろうと述べている。

本研究の対象とする荒馬も、地域によって異なった荒馬が伝承され、植木のいう圏域が形成されている。植木が指摘するように、荒馬の分布を面として捉えて比較分析をする視点は、荒馬の伝播の道筋やその年代を明らかにする可能性を広げるものであろう。

一方で、荒馬は起源や由緒を示す史料が少なく、口承に頼るところが大きい。またそれぞれの背景となる年中行事や祭りは、時代による医学や農業技術の発展や社会構造の変化から本来の意義は薄れ、行事の内容が省略・習合し、次第に芸能娯乐的なものに変化していったと考えられる（尾上町教育委員会，1981：113-118）。

そこで本研究では、「津軽の風土、政治・経済のもとで馬と人との生活交流を通じて、様々な様式を派生させながら、津軽の広範囲に伝播し、時代の趨勢とともに今なお変化し続ける民俗芸能」である荒馬の分布と地域毎の芸態の特徴からその圏域を措定し、その典型となる荒馬の比較検討から、荒馬の類型化を図ることを目的とする。

## 1-2 研究方法

以上の研究動機に基づき、本研究の目的を遂行するには、以下の手続きが必要になる。

第一に、これまで郷土史大系、民俗芸能研究者や民舞教育実践者によって説明されてきた、荒馬に関する多様な説と本研究との関係性を明示しておく必要がある。それゆえ、主な荒馬と年中行事に関するこれまで提示されてきた情報を整理し、本研究の方法が既存の体系をどのように継承ないし差異化するものであるのかについて論じる。第二に、荒馬の分布図を作成し、各地域に伝わる荒馬を構成する個々の下位体系の特徴をつぶさに抽出し、それらの拡がりに基づく圏域を示す。その上で、各圏域において継続性に信頼が持てる荒馬、つまり今も地域の年中行事や祭りとして実施され、フィールドワーク調査が実施可能だったものを典型として抽出し、比較分析を試みる。

なお、荒馬の分布状況については、主に過去4回行われた青森県全域を対象とした民俗芸能調査<sup>注8</sup>の結果を主な資料として分布図を作成した。それに加え、同じく民俗芸能調査報告書の詳細報告や伝承されている市町村の史誌の記述内容と突き合わせ、さらに筆者自身が2018年6月から8月にかけて行ったフィールドワーク（以下、「2018FW<sup>注9</sup>」）の結果を加えて考察を行うこととする。

## 2 先行研究

荒馬の起源や由緒は、虫送りやサナブリの行事との関連で論じられることが多い(小池, 1961: 2-9、今別町, 1967: 505-506、進藤, 1970: 408-413、青森県教育委員会, 1986: 3-4、大石, 2010: 168-174)。今別町の荒馬は、現在はねぶた祭りの中で踊られているが、今別町史には「サナブリの行事」と記されている(今別町, 1967: 505)。また、進藤(1970: 409)は荒馬が虫送り行列だけでなく「ボンの神(ボウノカミ)」や「鹿島流し」などの他の行事においても共通して踊られていたことから、「虫送りに固有の舞踊というより、サナブリの送り行列に伴ったものと考えべき」としている。つまり、田植えが一段落した後のサナブリ行事として、虫送りをする地域とボウノカミ送りをする地域があり、それらが習合している場合も多く存在した。

小池(1961: 6-7)は、虫送りと荒馬踊りの関係について、「元来別個の発生源をもつもの」と捉え、西、北津軽の場合は「虫送りに荒馬踊りが加わり」、南津軽では「一度合体したものが分離した又全然合体せず荒馬踊りが独立したまま宗教的儀式から現在の様な芸能に派生したことも考えられる」と、地域によって荒馬が加わった行事や習合の仕方が違っていった可能性を指摘している。

このように、荒馬がそれぞれの行事から派生したのではなく、別個の発生源をもつ荒馬が津軽のサナブリ行事として行われていた虫送りやボウノカミ送り、ねぶた祭りに取り入れられ踊られるようになったことは、いくつかの由緒譚や論考の中で指摘されていて、本研究でもその立場を支持するものである。また、小池の論考は、地域の年中行事の違いで荒馬の取り入れられ方が違っていったこと指摘するもので、大変重要な示唆を含んでいる。

荒馬の類型化については、進藤(1970: 410)が、踊りの形・動作から「たんに暴れ馬の模倣で型も自由に跳ねまわる(俵元)」「それぞれ木製の馬頭をかかえた6人が手綱でたがいにつながれて踊る(小泊)」「南部藩の駒踊と類似し、馬体を表す模型を身につけて多数が円陣を組んで踊る(五所川原市藻川)」「男女組になり、女は花笠をつけ扇をかざし、男は駒踊の扮装で連れあって踊る(今別)」「1人が馬頭模型をかかえこんで踊り、2人が両側で手綱を取って踊る(相内、中里、金木、小曲、長富)」の5つに類型化している。進藤の類型化は、津軽地方に広く伝わる荒馬の全体を俯瞰して捉え、各地域に伝わる踊りの様式に着目して類型化を図った点で示唆的である。さらに、伝承地に伝わる実施時期を調べるとこれらの芸態がどの年中行事において特徴的であるのかということも明らかになる。

このように、地域における年中行事と荒馬の関係は体系的ではないにせよ、部分的に論じられてきた。本研究ではその成果に学びつつ、津軽地方全体の荒馬と年中行事との関連を、荒馬を含む行事全体の芸態を構成する個々の下位体系に分類し、それらを整理することでその地域分布を捉え直すことを試みたいと考える。

## 3 荒馬の分布と圏域

先に述べた通り、津軽地方の主な荒馬と年中行事の関係を示したものが表1、それを津軽地方の地図にマッピングしたものが図1である。

表1の作成のために参照した調査資料(注8を参照)は、昭和後期から平成に行われた調査結果に基づいている。したがって、それ以前にはさらに多くの荒馬が伝承されていた可能性がある、しかしながら、図1に示したように、伝承されている地域と年中行事の関係は明確に区分可能であり、荒馬は津軽地方の広い地域に存在しているが、その土地で行われている年中行事の様式に見合う芸態に変化しながら伝承された可能性が考えられる。

表1 主な荒馬と基盤となる年中行事

番号	民俗芸能名	所在地（現在の住所）	基盤となる年中行事
①	八幡崎の荒馬	平川市八幡崎	ボウノカミ送り
②	田舎館の荒馬	南津軽郡田舎館村田舎館	ボウノカミ送り
③	柏木町荒馬踊	平川市柏木町	サナブリ
④	久吉駒踊	平川市碓ヶ関久吉	虫送り
⑤	金木さなぶり荒馬踊	五所川原市金木町	虫送り
⑥	嘉瀬の荒馬	五所川原市金木町嘉瀬	虫送り
⑦	長富の荒馬	五所川原市長富	虫送り
⑧	俵元の荒馬	五所川原市俵元	虫送り
⑨	相内の荒馬	五所川原市相内	虫送り
⑩	中里の荒馬	北津軽郡中泊町中里	虫送り
⑪	牛潟の荒馬	つがる市牛潟町	虫送り
⑫	今別荒馬	東津軽郡今別町今別	ねぶた祭り
⑬	大川平荒馬	東津軽郡今別町大川平	ねぶた祭り
⑭	二股荒馬	東津軽郡今別町大川平二股	ねぶた祭り
⑮	浜名の荒馬	東津軽郡今別町浜名	ねぶた祭り
⑯	鍋田の荒馬	東津軽郡今別町鍋田	ねぶた祭り
⑰	村元の荒馬	東津軽郡今別町村元	ねぶた祭り
⑱	大泊の荒馬	東津軽郡今別町大泊	ねぶた祭り
⑲	野田荒馬	東津軽郡外ヶ浜町平館野田	ねぶた祭り
⑳	増川荒馬	東津軽郡外ヶ浜町三厩増川	ねぶた祭り

4つの民俗芸能調査結果と市町村史誌を基に筆者が作成。

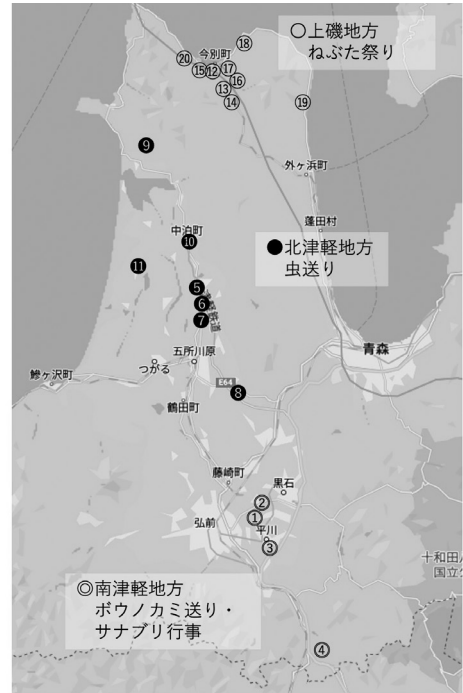


図1 主な荒馬が伝承される圏域

4つの民俗芸能調査結果と市町村史誌を基に著者が作成。

具体的には、津軽の荒馬は、次の3つの圏域に分類できる。

1つ目は表1に示した①から④が伝承される南津軽地方と呼ばれる圏域である。現在の田舎館村と平川市にかけての地域にあたる。この地域ではボウノカミ送りを中心に、それらを含むサナブリの行事の中で荒馬が踊られている。

2つ目は⑤から⑪が伝承される北津軽地方と呼ばれる圏域である。岩木川の中流域から下流域、現在の五所川原市、つがる市、中泊町にかけての地域で、この地域では虫送りの中で荒馬が踊られている。

3つ目は⑫から⑳が伝承される上磯（かみそ）地方と呼ばれる地域である。上磯は東津軽地方のうち陸奥湾に沿って西側の外ヶ浜町、今別町付近を指し、この地域ではねぶた祭りの中で荒馬が踊られている。

これら圏域の典型として、南津軽地方の①八幡崎の荒馬、③柏木荒馬踊、北津軽地方の⑤金木さなぶり荒馬、⑨相内の荒馬、上磯地方の⑫今別荒馬、⑬大川平荒馬、を抽出する<sup>註10</sup>。これらは今現在も地域の年中行事や祭りの中でその姿を見ることができる。また、⑤⑫⑬は民俗芸能としての荒馬が青森県無形民俗文化財に指定され、⑨は虫送りの行事が同じ指定を受けている。①③は平川市無形民俗文化財に指定されている。

## 4 圏域毎の荒馬の比較検討

### 4-1 南津軽地方の荒馬

この地域は津軽藩政時代から農業が盛んな地域であったが、他の地方と比べ用水や気候の面で恵まれていたという（尾上町，1992：114-115，817）。また、津軽の最南端にある碓ヶ関は秋田藩との国境で、関所が置かれていた。



この地域には、サナブリの行事としてボウノカミ送りをする地区と虫送りをする地区、またはそれらが習合した様式の地区が混在している。①②の地区はボウノカミ送り、④の地区はかつては虫送りとして行われ、1994調査では虫送りは行われず不定期開催となっていた。③の地区はサナブリの行事として行われていたが、1994調査では④と同様に不定期開催となっていた。

また、この地域には、荒馬を意味する複数の名称も混在している。①②は荒馬だが、③はかつて「荒駒(あらこま)」と呼ばれていた。④は「駒踊」の名称を有する。平成2年1月1日発行の『津軽新報』は「伝統芸能荒駒踊り」という見出しで、①②③を紹介している(津軽新報社, 1990)。④は駒踊が盛んな秋田や岩手と隣接する地域であるため、周辺地域に共通する駒踊の名称が用いられた可能性も考えられる。いずれにしても、この圏域は荒馬と駒踊が混在する中で、独自の芸態が確立したと考えられる。以下では、この圏域における典型として抽出した①八幡崎の荒馬と③柏木町荒馬踊について詳述する。

#### 4-1-1 八幡崎の荒馬

八幡崎の荒馬は、7月上旬に行われる「八幡崎疫ノ神(ボウノカミ)送り」の中で踊られる。明暦元年の「霊送祭」や享保二年の「大祈祷」を起源とする説もあるが、明確な由緒は不明である(尾上町教育委員会, 1981: 113-114)。藁で作った男女の人形(ボウノカミ)を中心に、様々な役が連なる風流行列を伴っている。筆者が調査に訪れた2018FW時の行列の構成は、采配振り、鼻天狗、袴士、疫ノ神、幟(「天下泰平萬民安穩」「風雨順時五穀豊穰」と記す)、供奴(挟箱、槍持)、ササラ、太刀振り、荒馬、お囃子(笛、太鼓)から成っていた。尾上町教育委員会(1981: 116)によると、かつてはもっと多くの役があり、山車も曳かれていたという。



写真1 「八幡崎の荒馬」の行列  
2018年7月8日 筆者撮影

作り駒は、楕円の枠に、板状の馬頭の根本を紐で結びつけ、もう片方を衣装の腰紐に結びつける。馬頭は首から頭にかけて一枚の板から切り出され、鬣(たてがみ)と耳が付けられている。口元に手綱が結ばれ、踊り手はそれを掴んで踊る。馬の枠の周辺には幕布を垂らし、枠の後ろ半分の臀部は布で覆い、「〇に八」が描かれた白い布がもう一枚垂れている。後ろには藁で作った尾が真っ直ぐ伸びるように付けられている。

八幡崎の荒馬は、馬役が2頭並ぶように列を作り、2頭が対になって内側に馬頭を近づけたり、外側に向かって跳ねたり、左右対称の動きで踊りながら行列を進めて行く(写真1)。

八幡崎の荒馬は、「神々が天から降りるとき、荒馬に乗って飛来するという観念から」(尾上町教育委員会, 1981: 120) はじまったといわれ、「荒馬」の呼称が具体的な馬の仕草や場面と対応しているわけではない。

この荒馬の動きは、やや中腰の姿勢で、足踏みをしたり片足に乗って地面を踏みしめたりしながら、お囃子に合わせた振りを踊って進んで行く。踊りは左右に3回ずつ地面を踏む動作をし、それに合わせて馬頭を上下に振る。そして、隣の馬と馬頭を1回ぶつけ合い、足を切り替えて足踏みをする。ここまでがひとまの振り(以下、「ひと踊り」)で、このひと踊りを繰り返す。お囃子に合わせて行列全体の行進が始まれば踊りも始まり、行進が止まれば踊りも止まる。お囃子が続く限り繰り返される振りの構成になっている。以上は先にも述べた筆者による2018FWの撮影記録に基づく。

#### 4-1-2 柏木町荒馬踊

柏木町荒馬踊は、かつては青年団を中心にサナブリの行事として行われ、現在は保存会が地域の小学校と連携し、柏木小学校の子どもたちによって学校や地域の行事で踊られている。保存会から提供いただいた資料によると、「南部藩第二三代の南部安信が、天文二年（一五三三）、津軽大光寺を討ち滅ぼしたときに、南部から津軽へ伝えられたもの」（柏木町荒馬保存会、作成年不明）が由緒と伝えられている。また、同じく保存会から提供いただいた映像資料によると、柏木町荒馬踊の行列の構成は、太刀振り、ササラ、荒馬、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）から成る（柏木町荒馬保存会、2018）。

作り駒は、楕円の枠に立体的な馬頭が付いている。馬頭には円筒形の首があり、細長い鬣と首付近に鈴が付いている。枠には裏地付きの装飾が施された幕布と麻紐で作られた尻尾が取り付けられている。八幡崎の作り駒の様に臀部を覆う布や紋の入った布はない。

この荒馬も、馬役が2頭並ぶように列を作り、円筒形の首を持って踊る。2頭が対になり、左右が入れ替わったり、後退、前進を繰り返したりしつつ行列を進めて行く。こうした隊列、入れ替わり、後退、前進の所作が意味するものは不明である（写真2）。

この荒馬の動きもやや中腰の姿勢で、お囃子に合わせて振りを伴いつつ、踊り進んで行く。踊りは左右に3回ずつ地面を踏む動作をし、それに合わせて馬頭を左右に振る。そして、足踏みをしながらお互い向きあい、次のフレーズで左右を入れ替える。その後また前を向いて行進していく。これがひと踊りの振りで、八幡崎の荒馬と同様、荒馬単体としての始まりや終わりがあるわけではなく、お囃子が続く限り繰り返される振りの構成になっている。以上は2018FWの際に保存会より提供いただいた写真、および映像資料に基づく。



写真2 「柏木町の荒馬踊」の行列の様子  
2018年1月14日撮影 保存会提供の資料より

#### 4-2 北津軽地方の荒馬

この地域は津軽藩政時代に新田開発が行われ、その頃に多くの村ができた（高橋、1970：41-55）。虫送りが盛んに行われて来たのはこういった歴史的背景と関係している。

この地域では、サナブリの行事として虫送りが行われる。風流行列を構成する主要な要素は「ムシ」と呼ばれる藁製の蛇体や龍体で、それに附随する馬を付けた踊りはどの地区であっても「荒馬」と呼ばれている。以下、この地域の典型と考えられる⑤金木さなぶり荒馬と、⑨相内の荒馬について詳述する。

##### 4-2-1 金木さなぶり荒馬

金木さなぶり荒馬は、6月中旬に行われる虫送りの中で踊られる。かつて新田開発が進められ、農村の虫祭も賑やかになってきた頃に、津軽四代藩主津軽信政公が金木村の視察に訪れ、その時のエピソードを虫送りの荒馬踊りに取り入れたという由緒譚が残っている（金木町、1976：673-674）。金木さなぶり荒馬の行列の構成は、巫女、太刀振り、オガシコ（道化）、獅子踊、荒馬（馬役1人と馬引役2人）、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）から成る。元々別々に行われていた太刀振り、獅子踊、荒馬を、1970年頃に統合して新たな芸態をつくり出したと言われ（大石、2010：173）、近年になって行列に巫女が加わったそうである。しかし、虫送りにつきものであるムシ、すなわち、藁製の蛇体や龍体は伴っていない。

作り駒は、やや小さい楕円の枠に、木製の馬頭と藁製の尻尾が付いているが、幕布はない。馬頭は立体的で、円筒形の首に鬣のあるやや大きめの頭が付けられている。

この荒馬は馬役1人と馬引役2人が3人1組で踊る。3人とも全て男性である。金木さなぶり荒馬は「殿

様の騎馬」を表現している。これは、津軽藩四代藩主信政公が民情視察で金木村を訪れた際に、村外れの丸木橋を馬に乗ったまま颯爽（さっそう）と渡ったという「橋渡りの英姿」を舞踊化したものとされ（金木町、1976：673-674）、実際の踊りでも丸木橋の模型を飛び越す場面が演じられる（写真3）。

踊りは、基本中腰の姿勢で、馬役は手綱を持った手で馬頭を上下左右に振り、馬を操っている様に踊る。馬引役はそれに合わせて共に進んで行く。特に振りがまとまったひと踊りはなく、左右の軸足を切り換え地面を1回ずつ踏む動きを伴いながら、ストーリーを演じたり、行列と一緒に進んだりする。以上は筆者の2018FWの撮影記録に基づく。



写真3 「金木さなぶり荒馬」の「橋渡りの英姿」の場面  
2018年6月16日 筆者撮影

#### 4-2-2 相内の荒馬

相内の荒馬は、6月第2土曜日に行われる虫送りで踊られる。相内の虫送りは「津軽地方の虫送りの原型」といわれており、藩政時代は「虫祭」と呼ばれ、新田開発が進められた北津軽一帯では特に盛んであったといわれている（五所川原市、Webサイト）。

相内の虫送りの行列の構成は、大ムシ（ムシ車）、小ムシ（踊り手）、荒馬（馬役1人と馬方2人）、オリダ持ち、太刀振り（青年団、大人、子ども）、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）から成る。オリダ持ちとは道化を演じる者を指し、虫送りを観ている観客におどけたしぐさを見せて、行列を盛りあげる役である。

作り駒は、正確な楕円ではなく、後ろ側の方が広がっている枠に、立体的な馬頭と黒く太めの尻尾がつく。枠の後ろ側には逆さにした箕をつけることで臀部に丸い膨らみをもたせ、その上を布で覆っている。馬頭には細長く編んだ鬣があり、首はないが、付け根に大きな鈴が付いている。

相内の荒馬は「農耕馬」そのものを表現していると思われる。これについて文献資料に基づく由来譚は残されていない。但し、馬役が行列の途中で動くのを嫌がって止まったり後ずさりをしたり、その場に寝そべったりする場面が見られる。それを馬方が手綱を引いたり、綱で叩く真似をしたりしながら、本物の馬をなだめて操る姿が演じられる（写真4）。こうした馬のしぐさの再演が含まれていることは、農耕馬として、馬と身近な日常を共有していたことの例証を示すものであるかもしれない。

踊りは、ひと踊りのような振りのまとまりはなく、金木さなぶり荒馬と同様に左右の軸足を切り換え、地面を1回ずつ踏む動きをしながら道々を進んで行くが、所々で止まったり、後ずさりしたり、地面に寝転ぶなどして、馬になりきって即興的に踊ったりする。以上は筆者の2018FWの撮影記録に基づく。



写真4 「相内の荒馬」の行列の様子  
2018年6月9日 筆者撮影

#### 4-3 上磯地方の荒馬

この地域は津軽海峡や陸奥湾に面する沿岸部で、人々の多くは古くから漁労で生計を立てていた。中心となる今別は津軽藩の「九浦（くうら）」の1つに数えられ、かつては奉行所が置かれ、日本海航路の要所の1つであった（青森県、2018：314-315）。

この地域では、ねぶた祭りの中で荒馬が踊られる。ねぶた祭りは津軽海峡を越えて下北半島にも伝わっ



ており、海運によりねぶた文化が伝わったことを意味している。しかし、下北半島のねぶた祭りには荒馬は伝承されていない。以下、この地域の典型と考えられる⑫今別荒馬と、⑬大川平荒馬について詳述する。

#### 4-3-1 今別荒馬

今別荒馬は、8月上旬のねぶた祭りで踊られる。今別荒馬は、元々はサナブリの行事で踊られていたものが、ねぶた祭りに引き継がれたといわれている（今別町，1967：505）。

今別のねぶた祭りの行列の構成は、花もらい、荒馬（馬役の男性と手綱取り役の女性）、跳ね人（はねと）、お囃子（太鼓、笛）、ねぶたから成る。花もらいとは、行列を先導しながら、各家々を回って花（ご祝儀）を集める役を指す。花をいただくと、その家の前で厄払いや家内安全を祈願して荒馬を踊る。跳ね人はねぶた祭りを盛り上げる踊り手のことで、馬と手綱取りを囲むように輪になって踊る（大石，2010：168-171）。

作り駒は、楕円形の枠に木製の馬頭と麻などの尻尾を付け、幕布が垂らされている。馬頭は厚みのある板で首から頭を切り出し、鬣と耳が付けられ、口元に手綱が結ばれている。枠の後ろ側の臀部は八幡崎や相内の様に布で覆われていて、相内の様な箕は入っていないが、枠を曲げることで膨らみをつけている。更に四つ菱の紋が入った布が一枚垂れている。

今別荒馬では、馬役の男性と手綱取り役の女性がペアになって踊る（写真5）。初め荒馬は手綱取りに引かれておとなしく踊り始めるが、やがて荒れ出し、手綱取りから離れるとますます荒れ狂って踊るようになるといわれていて（今別町，1967：505）、実演もそのように踊られる。

今別荒馬の振りは、ひと踊りで構成されている。町の中心部や花をいただいた家の前に荒馬が来ると、合図が出され行進が止まる。次に踊りの合図が出され、そこでひと踊りが披露される。そして、踊り終わると次の場所へ移動し、再び合図が出されて、同様のひと踊りが披露される。この流れがしばらくの間続いて行く。お囃子の節には、町を練り歩く時の「あゆみ（行進）」、ひと踊り踊る時の「踊り」、全ての門付けを終えて集会所等に帰る時の「戻り節（バツタラ）」の3種類がある。

今別荒馬の馬役の振りは4つの動きで構成されている（手綱取りの動きは馬に連動するが、ここでは省略する）。また、今別の場合は、虫送りの荒馬にも見られる1回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作と、ボウノカミ送りの荒馬に見られる3回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作のいずれの動作も含まれている。馬頭を上下に激しく振って踊るのも特徴で、この動作によって、馬の荒々しさが表現されている。以上は筆者の2018FWの撮影記録と実体験に基づく。



写真5 「今別荒馬」の馬と手綱取り  
2018年8月7日 筆者撮影

#### 4-3-2 大川平荒馬

大川平荒馬は、今別と同様に8月上旬のねぶた祭りで踊られる。大川平の荒馬の場合もサナブリの行事として行われていた（青森県教育委員会，1996：230）。

大川平のねぶた祭りの行列の構成は、花もらい、太刀振り、荒馬（馬役の男性と手綱取り役の女性）、お囃子（太鼓、笛、手平鉦）、ねぶたから成る。以前は跳ね人も見られた。

作り駒は、ほぼ今別のものと同じ形で、楕円形の枠に、頭と首を板から切り出した馬頭と麻の尻尾が付けられ、黒い幕布が垂らされている。臀部の膨らみはないが布で覆われていて、三つ星の紋が入っている。



大川平荒馬も、馬役の男性と手綱取り役の女性がペアになって踊る (写真6)。初めは手綱取りが綱を持って踊るが、手綱取りから荒馬が離れるとより荒々しく踊るように変化するところも今別荒馬と共通している。大川平荒馬にも今別荒馬と同様のひと踊りがあり、家々の前で合図が出されると行進が止まり、ひと踊りを披露する。お囃子の節は今別同様、「あゆみ (行進)」「踊り」「戻り節 (バッタラ)」の3種類がある。



写真6 「大川平荒馬」の馬と手綱取り  
2018年8月5日 筆者撮影

大川平荒馬の馬役の振りは3つの動きで構成されている。今別荒馬と同様に1回踏む動作と3回踏む動作を含むが、3回目の動作の時は軸足の切り換えを行うために両足を使って地面を踏む。今別荒馬のように馬頭を上下に振るのではなく、左右に横振りしながら踊る。その際に足の裏を見る様な姿勢を取るため、より低い姿勢が必要とされる。また、こうした低く腰を落とす動作によって地を踏む農耕馬のような力強さを表現しているといわれている。以上は筆者の2018FWの撮影記録と実体験に基づく。

## 5 荒馬の様式

これまで、荒馬の分布から圏域を措定し、そこに現在も伝承される典型的な荒馬について詳述してきた。これらの下位体系をまとめて比較すると、表2に示したように全ての荒馬に共通する様式と、圏域毎に共通する様式があることがわかる。

### 5-1 全てに共通する様式

全てに共通する様式として、作り駒の形状をあげることができる。どの荒馬も楕円形の枠に馬の首と尻尾が付けられ、その中に体を入れて固定するようになっており、この馬に見立てた装具を上手にさばきながら踊る。

お囃子は太鼓と笛による演奏が共通している。また、どの荒馬も地面を1回踏んだり、3回踏んだり、その場で足踏みをしたりと、「踏み」という動作が重要とされている。踊りの中で地面

表2 典型荒馬における要素の比較

		八幡崎 の荒馬	柏木町 荒馬踊	金木さな ぶり荒馬	相内の荒馬	今別荒馬	大川平荒馬
名称	荒馬	●	●	●	●	●	●
	荒駒		(●)				
年中行事	サナブリ		●			(●)	(●)
	ボウノカミ送り	●			●		
	虫送り			●	●		
	ねぶた祭り					●	●
行列の構成	先導役 (采配振り、 巫女、花もらい)	●		●	●	●	●
	道化役			●	●		
	ボウノカミ	●			●		
	ムシ			(●)	●		
	ササラ	●	●				
お囃子	太刀振り	●	●	●	●		●
	太鼓	●	●	●	●	●	●
	笛	●	●	●	●	●	●
	手平鉦		●	●	●		●
作り駒	板状の馬頭	●				●	●
	立体的な馬頭		●	●	●		
	首がある	●	●	●	●	●	●
	鬘	●	●	●	●	●	●
	首に鈴		●		●		
	幕布	●	●		●	●	●
	臀部の膨らみ				●	●	
臀部を布で覆う	●			●	●	●	
踊りの形態	馬同士が対	●	●				
	手綱取りが2人			●	●		
	手綱取りが1人					●	●
	手綱取りが男性			●	●		
	手綱取りが女性					●	●
踊りの振り	地面を1回踏む			●	●	●	●
	地面を3回踏む	●	●			●	●
	足踏み、 その場での振り	●	●			●	●

( ) 付きは、かつてそうだったといわれる要素

を踏む動作は、地面の中の邪気を追い払う意味があり（仲井ら編，1981：399）、「邪気を追い払う」ための所作は、厄災を払う虫送りや病送りの思想とも共通している。

## 5-2 圏域毎に共通する特徴と年中行事・祭りとの有機的関連性

### 5-2-1 南津軽地方の荒馬

南津軽地方の荒馬は、ボウノカミ送りをはじめサナブリ行事で踊られ、手綱取りが付かず荒馬が独立している。その形態は秋田や岩手の駒踊とも共通するが、柏木町荒馬踊はかつて「荒駒」と呼ばれており、これらの例は駒踊との関連が深いことを示している。

踊りは3回地面を踏む振りを中心にひと踊りが構成され、お囃子に合わせて繰り返し踊られる。また、行列の中にササラを鳴らして進む役がいることも共通した特徴である。

この圏域の荒馬は、シンプルな振りのパターンを継続して行進している。行列には荒馬以外にも様々な役割があり、荒馬は行列の中の主要な役割の1つを担いつつも、行列全体の中の1つとして位置付けられ踊られている。

### 5-2-2 北津軽地方の荒馬

北津軽地方の荒馬は、虫送りで踊られ、1人の馬役に2人の手綱取り（馬方）が付く。踊りは1回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作から成る。さらに、殿様の騎馬や農耕馬など具体的な場面に即した馬の姿がイメージされ、表現されている。一連の統一された所作から成るひと踊りは見られない。むしろ、その場で即興的に表現されることが共通した特徴である。

手綱取りが付いたり、即興的な踊りが見られるということは何を意味するのか、それは、荒馬と人間の関係性ではないだろうか。虫送りは稲作と関係が深い行事である。そして、かつての稲作には労働力としての馬が欠かせなかった。それだけ人間と馬の関係は分かちがたく、そのことを荒馬が表現している。

### 5-2-3 上磯地方の荒馬

上磯地方の荒馬は、ねぶた祭りで踊られ、馬役の男性と手綱取り役の女性がペアになって踊る。踊りは1回ずつ地面を踏みながら左右の足を切り返す動作と、3回ずつ地面を踏む動作を組み合わせたひと踊りがあり、それを行列が練り歩く際の途中途中で披露される。

男女ペアで踊ったり、ひと踊りがあることは、荒馬が「魅せる踊り」に変化したことを物語っている。ねぶたもその造形美や絵の色彩を楽しむ文化である。それに溶け込んだ荒馬は、単に同じ振りを繰り返すのではなく、振りの組み合わせや、手綱が切れた後の荒々しい踊りへの変化など、観衆を楽しませる芸能へと変化したと推察される。

## 6 結語

本研究は、荒馬の分布と圏域ごとの祭りの形態を整理し、その圏域において典型的であると考えられる芸態にみられた共通点と差異について論じ、荒馬の類型化を図った。この類型化は、複雑に絡み合う、圏域の祭り全体を構成する個々の要素と全体との関係を示すことにつながった。こうした類型化は、民俗舞踊研究における単線的な編年的考察を困難にしてきた理由を少なからず示唆しているように思われる。つまり、影響力のある圏域のある祭りから他の地域の祭りに徐々に広がったと考えるよりも、圏域内に存在している地区ごとの独自の祭りの個々の要素をなしていた舞踊（荒馬）が別の地区に伝わる際、その圏域ないし、地

区の祭り全体を支配していた様式に溶け込む形で導入された可能性とその分化を物語っている。それゆえ、以上のことから、祭り全体の伝播を編年史的に再構成することや、踊りの様式から祭り全体が確立する年代を特定することはむしろ困難であり、それよりも、祭り全体を特徴づけるどのような要素が最もその圏域ないし、特定の地区の内部で重視されているかということが歴史的に意味をなし、圏域内の地区の風流を解釈する上で、重要であるということが明らかになったと言える。

## 注

- 注1) 駒踊は荒馬と同様に作り駒を付けて踊る芸能で、青森県南部地方、岩手県、秋田県に散在し、一部は移住民によって北海道にも伝えられている（仲井ら編，1981：187）。
- 注2) 作り駒を腰に付けて踊ったり走ったりする芸は江戸期から見られ、「ホニホロ」と呼ばれていた。宮武（1910）によれば、「ほにほろは寛政の頃初めて流行」し、「ほにほろという語は和蘭陀語らしい」ことから、「此腰付馬も和蘭陀より渡来したもの」ではないかと推察している（宮武，1910：5）。
- 注3) さなぶり・サナブリ（早苗振）とは、田植え終了後の祝のことで、サオリ、またはソウリに対する言葉である。サオリは春、田の神が山から降臨すること、サナブリ（サノボリ）は秋仕事を終えて帰られること意味する（西角井編，1958：342-343）。津軽ではサナブリの行事として虫送りやボウノカミ送り、またはそれらが習合した形態での風流行列が行われた。
- 注4) ボウノカミとは、「疫ノ神」「煩惱神」「疱ノ神」「暴ノ神」とも表記され、かつては疫病の大流行は「悪疫神が暴れまわるもの」という観念があり、ボウノカミ送りとは、疫病をもたらずボウノカミを鎮め追い払うために行われる呪術的な行事のことである（尾上町教育委員会，1981：113-114）。
- 注5) 虫送りとは、稲作の障害となる害虫を追い払う呪術的な行事で、その形態は地方によってさまざま、津軽地方の場合、「ムシ」とよばれる藁の蛇体や龍体が作られ、それを担いでムラを練り歩き、最後に村外れの境界に祀るのが一般的である（成田，2015：6-7）。
- 注6) ねぶた祭りは、青森県を代表する祭りで、津軽地方では多くの市町村でその地域独自のねぶた祭りが行われている。元々は旧暦7月7日に行われた七夕の行事で、民間に伝わった眠り流しの行事が発展したものと言われている。眠り流しとは、夏季の睡魔やその他の穢れや災厄を追い払う行事で、人形や灯籠を持って練り歩き最後は川や海に流していた（青森県郷土館，1999：1-2）。
- 注7) 祭礼の行列も本来は「風流」に含まれるのだが、本研究では行列に焦点を当てるため、多くの演者が列を作って、賑やかに華やかに練り歩く行列を「風流行列」とした。（独立法人日本芸術文化振興会，掲載年不明）
- 注8) 表1作成のために参考にした調査は、1966、67年に行われた民俗総合調査（報告書：和歌森，1970、以下、「1966調査」）、1985年に行われた青森県の民俗芸能調査（報告書：青森県教育庁文化課，1986、以下、「1985調査」）、1994、95年に行われた青森県民俗芸能緊急調査（報告書：青森県教育委員会，1996、以下、「1994調査」）、2014年に行われた青森県津軽地方の虫送り調査（報告書：文化庁文化財部伝統文化課，2015、以下、「2014調査」）の4つである。加えて、田舎館村誌（田舎館村，1999）も参考にした。
- 注9) 2018FWは次の通りである。①2018年6月9日、五所川原市相内、「相内の虫送り」、ムシの制作過程・行列の観察、関係者への聞き取り、資料提供。②2018年6月16日、五所川原市金木、「金木町虫送り」、行列の観察、関係者への聞き取り、資料提供。③2018年7月7日、平川市柏木町、関係者への聞き取り、資料提供。④2018年7月8日、平川市八幡崎、「八幡崎疫ノ神送り」、行列の観察、関係者への聞き取り、資料提供。⑤2018年8月5日、今別町大川平、「大川平ねぶた運行」、行列の観察、関係者への聞き取り。⑥2018年8月6日、今別町今別、「今別ねぶた運行」、行列の観察、関係者への聞き取り。
- 注10) 「金木さなぶり荒馬」「今別荒馬」「大川平荒馬」「柏木荒馬踊」の4つは、既に固有名詞として青森県無形民俗文化財や平川市無形民俗文化財に登録されている呼称である。今別荒馬と大川平荒馬は同じ今別町に伝承され、それらを合わせた名称として「今別町の荒馬」と表されることもある。これに対して相内と八幡崎に伝わる「荒馬」はその地域内では単に「荒馬」と呼ばれていて、「相内荒馬」や「八幡崎荒馬」のような固有名詞としての呼称は存在しない。したがって、本研究内では「相内の荒馬」「八幡崎の荒馬」と表記する。



## 文献

- 1) 青森県郷土館, 1999, 『ねぶたと七夕』, 青森県郷土館: 青森, 1-15.
- 2) 青森県教育委員会, 1986, 『青森県の民俗芸能』, 青森県教育委員会: 青森.
- 3) 青森県教育委員会, 1996, 『青森県民俗芸能緊急調査報告書』, 青森県教育委員会: 青森 [北海道教育委員会・青森県教育委員会・岩手県教育委員会, 2005, 『日本の民俗芸能調査報告書集成 1 北海道・東北の民俗芸能 1 北海道・青森・岩手』海路書院: 東京, 183-386].
- 4) 文化庁文化財部伝統文化課, 2015, 『青森県津軽地方の虫送り—青森県津軽地方の虫送り調査報告書—』, 文化庁文化財部伝統文化課: 東京.
- 5) 独立行政法人日本芸術文化振興会, 掲載年不明「風流行列」,  
<https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc27/genre/furyu/gyouretsu/index.html>(参照 2023年8月20日).
- 6) 五所川原市, 掲載年不明, 「相内の虫送り(あいうちのむしおくり)」,  
<https://www.city.goshogawara.lg.jp/kyouiku/bunka/aiuchimushiokuri.html> (参照 2023年8月17日).
- 7) 今別町, 1967, 『今別町史』, 今別町: 青森, 390-395, 465, 501-506.
- 8) 田舎館村, 1999, 『田舎館村誌』, 田舎館村: 青森, 554-557.
- 9) 金木町役場, 1976, 『金木郷土史』, 金木町役場: 青森, 672-677, 691-692.
- 10) 柏木町荒馬保存会, 作成年不明, 「柏木町荒馬踊」, 柏木町荒馬保存会.
- 11) 柏木町荒馬保存会, 2018, 『ひらかわ伝統芸能フェスティバル 柏木町荒馬踊』, 柏木町荒馬保存会.
- 12) 小池雅昭, 1961, 「郷土の芸能—荒馬踊りと駒踊り—」, 『こまおどり』1, 弘前大学民俗研究部: 青森, 2-9.
- 13) 宮武外骨, 1910, 「ほにほろ考」, 『此花 第四枝』, 雅俗文庫: 東京, 5.
- 14) 仲井幸二郎・西角井正広・三隅治雄編, 1981, 『民俗芸能辞典』, 東京堂出版: 東京, 187, 126-127.
- 15) 成田敏, 2015, 「青森県津軽地方の虫送り概要」, 『青森県津軽地方の虫送り—青森県津軽地方の虫送り調査報告書—』, 文化庁文化財部伝統文化課: 東京, 6-10.
- 16) 西角井正慶編, 1958, 『年中行事辞典』, 東京堂出版: 東京, 342-343.
- 17) 尾上町, 1992, 『尾上町誌 通史編』, 尾上町: 青森, 114-115, 816-821.
- 17) 尾上町教育委員会, 1981, 「八幡崎村疫ノ神退散祭由来考」, 『古里の歴史民俗資料 八幡崎・西野曾江地区民俗資料調査報告書 第3集』, 尾上町教育委員会: 青森, 113-128.
- 18) 大石泰夫, 2010, 「二 外ヶ浜の民俗芸能」, 『西浜と外ヶ浜の民俗』, 青森県: 青森, 168-174.
- 19) 進藤幸彦, 1970, 「第3章 津軽の民俗舞踊」, 和歌森太郎編『津軽の民俗』, 吉川弘文館: 東京, 395-415.
- 20) 高橋秀夫, 1970, 「第4章 近世の津軽」, 和歌森太郎編『津軽の民俗』, 吉川弘文館: 東京, 41-55.
- 21) 津軽新報社, 1990, 「伝統芸能荒駒踊り」, 津軽新報: 青森, 1990年1月1日, 朝刊, 21面.
- 22) 植木行宣, 1993, 「民俗芸能分布圏試論—丹後における風流踊をめぐって—」, 植木行宣・樋口昭編『民俗文化分布圏論』, 名著出版: 東京, 11-36.
- 23) 和歌森太郎編, 1970, 『津軽の民俗』, 吉川弘文館: 東京.